２０１１　年　春

海外ゼミ合宿

姫路獨協大学　経済情報学部林ゼミのタイ合宿１１日間のすべて

タイってどんな国？

タイ王国は東南アジアに位置する国で、東のカンボジア、北のラオス、西のミャンマー、南のマレーシアに囲まれています。関西国際空港から首都のバンコクまで飛行機で 6 時間ほどです。人口は約 6600 万人（2010 年）で、面積は約 51 万平方キロメートルで、日本の約 1.4 倍です。政治体制は立憲君主制で、現国王陛下はラーマ 9 世（プーミポン国王）です。宗教は仏教徒が最も多いですが、日本の大乗仏教とは異なり、上座部仏教です。近代以降、欧米諸国に植民地化されておらずアジア諸国の中では珍しい国で、独特の文化を持っています。近年は日本企業の進出が盛んで、特に自動車産業に力を入れています。

タイの地形は象さんだ！

日本を出て外国を知り、そしてあらためて日本を理解する

経済情報学部の林ゼミでは、毎年春に2年生のゼミ生を連れてタイで11日間の合宿を行っています。合宿の一番の目的はバンコク郊外にある日系企業を訪れ、海外現地生産の実態を理解することにありますが、タイ人の生活、タイ料理、観光を通じてゼミの仲間達と一緒に異国の文化に触れ、あらためて自分たちが住む日本という国を理解することに、この合宿の大きな目的があります。今回で6回目となります。

合宿を通じて得られるもの

国際的な経営視野

日系企業の海外進出の実態や海外現地生産の仕組みを理解し、今の日本企業で大切となっている国際的経営視野を学びます。

異文化理解

合宿でのいろいろな活動を通じて積極的に異文化を理解し、あらためて日本という国を再理解します。

人間としての成長

仲間達と一緒に行動し、日本の教室では得られない数々の経験を積み、多くのことを考え、自分の中にある器を大きくさせます。

海外企業訪問

今回は、電子精密機器メーカーであるシンフォニアテクノロジー（タイ）社と、スナック菓子で有名なカルビータナワット社を訪問しました。

自分の目で現場を見る

バンコク郊外のバンプー工業団地内にあるシンフォニアテクノロジー（タイ）社の工場では、主に産業用で使われているパーツフィーダという機械を生産しています。この機械は、振動を利用することにより材料部品を自動整列させ、工場の生産ラインへ部品を搬出させる機械です。タイ人労働者が働く生産現場を見学するという、大変貴重な経験を積むことができました。

海外現地生産の仕組みを理解する

現地に駐在する日本人スタッフさんから製品や生産工程の詳しい説明を聴き、メモを取りながら見学しました。見学中は、学生達からスタッフさんへ多くの質問が飛び交い、スタッフさんも丁寧に答えて下さいました。

現役の社長から話を聞く

カルビータナワット社では、バンコク中心部にあるオフィスで大山社長からタイでの事業活動について直接お話を伺うことが出来ました。社長によるパワーポイントでの説明の後、2時間半に渡り全体でのディスカッションを行いました。

同社新発売の『さくらえびせん』原料になんと日本産甘エビを丸ごと利用しているそうです。

就活に活かす

現在カルビータナワット社の日本人スタッフは大山社長だけです。大山社長は自ら努力してタイ語を話し、タイ人と同じ食事をし、タイ人と同じ目線で話すことで、文化や習慣の違うタイ人従業員達と良好な信頼関係を築いています。ここに私たちは異文化理解の大切さを感じました。また、かつて日本のカルビー本社で役員として就活生の面接をした時のお話も聞くことができ、学生達は就活でのヒントをたくさん得ることできました。

多くの経験、大きく成長

タイを食べ尽くす

タイは南国特有の気候のおかげで食べ物が大変豊富にあります。私たちは11日間の中でたくさんのタイ料理を食べましたが、実はタイでは中華系の料理も美味しいんですよ。タイにも華人が形成した中華街（タイ語ではヤワラー）があり、毎日多くの人たちで賑わっています。タイではタイ系タイ人と中華系タイ人が上手く溶け合って暮らしています。そんなことも料理から見えてくるんですね。

世界遺産アユタヤで古都を偲ぶ

日本にある世界遺産では姫路城が有名ですが、タイの古都アユタヤも1991年に世界遺産へ指定されました。私たちは半日かけてアユタヤ市内を散策し、アユタヤの王の遺骨を納めた仏塔のあるワット・プラシーサンペットをはじめ、多くの寺院や遺跡へ訪れました。そして帰りは船に乗り、チャオプラヤー川をゆっくりとクルージングしながらバンコクへ戻りました。

象に乗って王様気分

タイと象の関係は歴史が古く、昔は戦争時に戦象として王室内で重用されていました。平時では材木の運搬などで、今も森林で活躍しています。現在タイでは各地にエレファントファームがあり、一般の観光客でも乗ることができます。また、タイのランパーンにはケガを負って働けなくなった象を保護するセンターがあります。

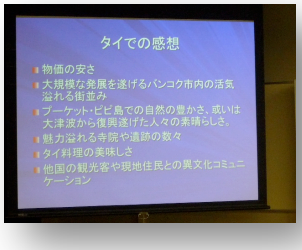
プーケットのリゾートにも行ってきた！

私たちはタイの南部にあるリゾート地、プーケットにも行って来ました。バンコクでは毎日ハードなスケジュールだったので、プーケットでは各々のんびり過ごしました。また、ディカプリオ主演映画『ザ・ビーチ』の撮影が行われたピピ島にも訪れ、マリンスポーツを楽しみました。

帰国後、４月２７日に タイ合宿報告会を開催

帰国後の4月27日に、学習支援センター主催、キャリアセンター協賛でタイ合宿の報告会を行いました。当日は経済情報学部の学生、教員はもちろんのこと、法学部からも学生と教員が参加しました。

合宿報告は参加者を3つのグループに分け、グループごとに作成したパワーポイントの資料に基づきそれぞれ30分程度の時間で行いました。各グループとも大勢の前でプレゼンテーションをした経験が乏しく、最初はかなり緊張した様子でしたが、段々と場の雰囲気に慣れてくるにつれ笑顔も出始め、発表後の質疑応答にも堂々と答えていました。



単に合宿へ参加したということで終わるのではなく、帰国後にあらためて合宿を振り返るための時間を設けることは大切です。海外での経験を通じ、自分は何を感じ取ったのか、自分にとって足らないものは何なのか、いま自分が行わなければならないことは何なのか、これらのことをあらためて振り返ることが重要なのです。

報告会での発表から、今回参加した学生達も何かをつかんで帰ってきたようです。

海外に関心を持とう

今回の報告会では、経済情報学部の学生、教員の他に、法学部からも多くの参加者が見られました。質疑応答で報告者が思わず答えに戸惑う様な鋭い質問を投げかけた学生もおり、報告をした学生達のみならず、参加者全員にとって大変刺激的な報告会になりました。この様な機会をきっかけとして、少しでも多くの学生達が海外へ関心を持つ様になることを期待しています。

タイ合宿を振り返ってみて

経済情報学部　准教授　林　拓也

早いもので、経済情報学部林ゼミによるタイ合宿も今回で6回目となりました。私が自分のゼミ学生たちを海外へ連れて行こうと考えたのは、学生たちと接していた時に感じた、彼らの海外に対する関心の乏しさからでした。日本の企業のあらゆる製品が海外で生産され、私たちが身近で使うものにしても日本製を探す方が困難となっている時代に、海外に関心が無いことは社会へ出てからの致命的な欠点につながります。なぜなら、今後日本はますます他の国とのつながりを深めなければ、生き残ることが困難になるからです。

林ゼミによるタイ合宿は、参加者わずか男子学生1名というところからスタートしました。当初はゼミ学生たちの関心をひくことが難しかったのですが、回を重ねるごとに参加者は増えてきました。合宿参加学生たちが毎年出発前に必ず私にいうことは、「11日間は長すぎる。」ということでした。しかし帰りのバンコクの空港で誰もが口をそろえていうことは、「まだ帰りたくない！あっという間の11日間だった。」なのです。

11日間の合宿の中で、毎年参加学生たちは大きく成長します。渡航する前はすぐに誰かを頼りにし自分自身で動けなかった学生が、海外へ行くことにより積極的に自分で動ける様になりました。国内では外国人を敬遠し、彼らとコミュニケーションをとろうとしなかった学生が、現地では使い慣れない英語を駆使し、必死になってタイ人と意思の疎通を図ろうと努力する様になりました。現地でヨーロッパ人の観光客から日本のことについて聞かれた時に上手く答えられず、いかに自分たちは自分たちの国のことについて無知なのかがわかった学生がいました。現地での企業訪問を通じて、国際的な舞台で自分も活躍していきたいと新たな志を持った学生もいました。

学んだこと、感じたことは学生ごとに異なっていますが、11日間の合宿を通じて学生全員何かを得たことは間違いなさそうです。

林ゼミによる11日間のタイ合宿の主な目的は現地の日系企業訪問にありますが、真の目的は海外での経験を通じて学生たちに人間としての器を大きくしてもらうことです。人間としての器を大きくさせることというのは、その人の人間としての味の深さを広げることです。味の深さが小さい人は器の中にある引き出しが少ないため、他の人と深いコミュニケーションを取ることが出来ませんし、何かを考えるにしても出てきた考えや主張には深みがありません。

人間としての器を大きくさせるためには読書を通じて知識を増やしたり思考能力を鍛えたり、あるいは他の人とディベートの訓練を行ったりなどいろいろな方法が考えられますが、林ゼミのタイ合宿はひとつのショック療法だと考えています。ただしショック療法とはいっても、自分たちが生まれ慣れ親しんだ日本という国を離れ、逃げ場のない海外という場でゼミの仲間達と一緒に様々な経験をし、多くの感動を共有し、各々で何かを得るといった、楽しいショック療法なのです。

経済情報学部林ゼミのタイ合宿は、今後も毎年春に2年生の学生を対象に行う予定です。2年生の春に合宿を実施する理由は、就職活動が3年生の秋から本格化するからです。就活が本格化する前に学生たちを海外へ連れて行き、合宿を通じて人間としての器をひと回り成長させた上で就活に臨んでもらいます。

私がタイ合宿で毎回楽しみにしていることは、合宿中に見られる学生たちの表情の変化です。企業訪問時に見せる学べるものは何でも吸収しようという真剣な表情。今まで食べたことのない味付けの料理にチャレンジした時の驚きの表情。金色に輝くタイ式の美しいお寺を見た時の目を丸くした表情。みんなで一緒にプーケットの海に沈む夕陽を見た時の感動の表情。

私はもしかしたら、こうした彼らの表情の変化が楽しみなので毎年合宿を企画しているのかもしれませんね…。